

[特別企画3]

献血セミナー中学生9,460人のアンケートから

藤田嘉秀, 品田隆史, 尾藤準也, 安原武志, 眞宮浩樹, 平井みどり
兵庫県赤十字血液センター

1. はじめに

兵庫県赤十字血液センター姫路事業所では、2014年11月から「輸血や献血を知ること、互いに助け合う精神や、命について、生きることについて考えること。」をテーマに中学生対象の献血セミナー（以下「セミナー」）を行ってきた。2018年3月までに延べ54回、計11,018人を対象に実施し、うち9,460人からアンケート調査の回答を得た。

アンケートで知り得た情報や、セミナーの効果と思われる10代献血者数の増加について紹介する。

2. 中学生セミナーの考え方

セミナーは『命のボランティア講座』という名称で、総合や道徳の授業中に進めている。この授業は「献血は見返りを求めずに人の役に立つことができるボランティア活動であり、互いに助け合う精神は『人権教育』につながると思います。また病氣と闘っている人たちが命の不安と向き合い、治療の苦痛に耐えていることを知ることで、命について、生きることについて考える『命の教育』につながることができるのではないかと考えました。」という学校長や養護教諭からの提言で始めることができた。

3. アンケート調査の概要

アンケート用紙はA4版で5つの問いに答える形とし、セミナー受講後の記入とした。義務教育ではアンケートの記入も「振り返り授業」であり、丁寧にしっかりと書いてくれる生徒が多い。

問1；今日の講座はどうでしたか

回答のうち「よくわかった」と「わかった」

を合わせると、99%以上が「わかった」と答えた。「わかった」の率が高いのは、実施のたびに担当教諭とスライドの内容について相談するなど、その学校に応じたセミナーを心がけているからであろう。

問2；献血を知っていましたか

88%が「知っていた」と答えた。「父がいつもしている。」や「母が何回も献血していて、大きくなったらお前もするように言われた。」など、家族の影響が強いようである。中には「弟がガンで入院していたから。」という書き込みもあった。

問3；受講して献血しようと思いましたか

8,120人(89%)が「思った」と答えた。一方で1,043人(11%)が「思わない」と答えた。「思わない」理由(を文例から選択)では「注射が怖い」(30%)と「痛そうだから」(30%)で大半を占めた。他は「健康によくないと思う」が9%、「自分がしなくてもよい」が7%、「必要性がわからない」は4%であった。

また、「思わない」理由の「その他」(20%)の書き込みでは「自分が貧血だから。」や「血を見るのが苦手。」というものが多かった。中には「輸血を受けたから。」もあり、セミナー後に「私が今、生きてここにいるのは献血のおかげです、ありがとうございます。」と駆け寄ってくる生徒がある。

問4；献血のイメージを教えてください

文例から複数回答可で選択する様式である。(表1)のとおり、多くの生徒が①から④を選び、献血は命を救うボランティア活動としてのイメージを持ってくれた一方で

⑥、⑦のような選択はわずかである。
また⑧「その他」には(表2)のような書き込みがある。

問5－1；若い献血者を増やす方法

「1,000円あげる。」「図書カードをくばる。」などの「物で釣る」的な書き込みが5,6%ある。また「SNSを利用する。」「スマホアプリでの情報提供。」「アイドルの起用。」なども5%程度ある。しかし、それらより多いのが「このような講演会をもっと

して、若い人に献血の本当のことを知ってもらえば増える。」である。

問5－2；セミナーの感想や意見

多くの中学生が持ってくれたのは「献血は素晴らしい。」や「医者や看護師だけでなく、私にも人の命を救えることが分かった。」「自分が今、あたりまえに生きていることが、どんなに幸せか分かりました。」というような感想であった。他にも、「将来、看護師になりたい気持ちが一層強くなっ

表 1

Q 4；献血のイメージを教えてください (選択方式で複数回答可)		
①人の命を救える大切なボランティア	8,026人	40.1%
②もっと多くの人が献血に参加すべき	4,907人	24.5%
③困っている患者さんを助ける社会的責任	3,297人	16.5%
④気軽に参加できるボランティア	2,418人	12.1%
⑤ボランティアに頼る献血制度に無理がある	554人	2.8%
⑥献血をしたい人だけすればよい	448人	2.2%
⑦将来自分がしなくても血液は足りている	196人	1.0%
⑧その他()	160人	0.8%

表 2

Q 4；献血のイメージを教えてください ⑧その他()の書き込み から	
・いたいやつ	
・むりやり人の命をつなごうとしている	
・血が吸われてフラフラする／本当の血液型がわかる	
・少し行きにくいイメージがあります	
・サービスがめっちゃある	
・もういっそ義務化したほうがいいかも	
・広瀬すずが可愛い	
・もっとも命に近いボランティア	
・健康な体であることの必要性を感じさせるボランティア	
・唯一直接助けることができるお金は何もできないこと	
・人の命はもちろん元気もあたえられる	
・命をつなぎ人の想いをつなぐ	
など	

た。」や「自分でも人の役に立てるんだという自分の生きている意味も見つけられる。」、「人々はみんなで助けあって生きているとても素晴らしい存在。」などに類する思いが多くみられた。また「献血は怖いし痛そうですが、命について考え思ったら、なんともない痛さだと思います。」など、献血推進の参考になる意見も多くあった。

血が苦手な生徒では「献血以外のボランティア活動をして、人の役に立ちたい。」と書き込んでいた。

中には「生きたくても生きられない人もいるので、自ら命を絶つようなことはしない方がいいと思います。」の書き込みもあった。

4. セミナーの効果

①10代献血者数の増加

姫路エリアは、兵庫県人口550万人のうち130万人が住んでおり、県民人口の約24%を占めている。

県内の中学生セミナーは、主に姫路事業所で取り組んでいるが、始めて3年が経過した2017年の夏頃から「学校で献血の話を聴いて来ましたという、姫路方面の10代の来所が増えている。」という知らせを複数の献血ルームから受けるようになった。

調べると、2017年度は県民の10代献血者数が前年度に比べて、延べ455人増加しており、その内200人が姫路エリアで、住所をみると3年以上中学セミナーを続けた3市2町で163人を占めていた。

②その他

- セミナーを実施するため、ライオンズクラブに地元の教育委員会や中学校の紹介を依頼したところ、多くのクラブで前向きに取り組んでもらうことができ、また、日頃の献血活動への意識も高まった。
- これまでにはなかった、市町教育委員会や現場教師らとのつながりができ、セミナーのやり方や今の10代の考え方などについて、アドバイスを受けることができた。
- 行政や地域団体などに、地元の10代の献血者数が伸びていることを知らせたところ、献血のPRなどについてケーブルテレビや商店街など、地域を巻き込んだ協力を得ることができた。

5. まとめ・考察

中学生の献血イメージには「いたいやつ。」や「少し行きにくい。」、「針が怖い。」などが一部にある。また、献血者を増やす手段としては「現金をわたす。」や「物で釣る。」というような考え方も、わずかにある。

しかし、「私たちができるボランティア活動で人の命が救える。」や「将来、自分も献血をして困っている人の役に立ちたい。」など好意的な意見や、意義がよく理解できたという書き込みが多かった。

アンケートからは、今の中学生の多くが、命や生きることについて真剣に考え、助け合いの社会やボランティア活動について、高い見識と参加意識を持っていることがうかがえた。

セミナーは『献血文化』を若者に広め、共助社会への参加のきっかけとなる有意義な手段であり、今後も地道に取り組んでいきたい。